

UP 応用数学選書 6 『超函数入門』 (下巻) 訂正

ページ, 行	誤	正
p.10 (5.1.14)式	$\mathcal{E}^{(0,n)}$	$\mathcal{E}^{(0,n)}$
p.12 (5.2.4)式	$K^{n''+1}$	$K^{n''+1}$
p.13 ↑ 9	j=0,1,2. 従って	j=0,1,2. 従って
p.15 (5.2.9)式	d_{λ}^n	d_{λ}^n
p.17 ↑ 7	繊維 C	茎 C
p.18 ↓ 2	即ち,	即ち,
p.19 ↑ 5	$\mathcal{H}^n U(\mathcal{F})$	$\mathcal{H}_0^n(\mathcal{F})$
p.19 ↑ 3	$H_s^0(\mathcal{F})$	$\mathcal{H}_s^0(\mathcal{F})$
p.25 ↑ 10	問 5.3.1	問 5.3.2
p.25 ↑ 7	示すことが	示すことに
p.25 ↑ 4	$\mathcal{F}(U)$	$\mathcal{F}(\tilde{U})$
p.29 ↑ 2	これは	これは
p.30 (5.5.5)式	u_{λ_0}	u_{λ_0}
p.32 ↓ 6	n 関する	n に関する
p.35 ↑ 2	$(-1)^k \check{\phi}$	$(-1)^k \check{\phi}$
p.36 ↑ 7	コホモロジーの	コホモロジーへの
p.40 (5.5.13)式	$\check{c}u^n$	$\check{c}_u^n$
p.40 (5.5.13)式	$\check{c}u^n$	$\check{c}_u^n$
p.41 ↓ 8	問 5.1.1	問 5.1.2
p.41 ↑ 1	U_{λ}'	U_{λ}'
p.42 ↓ 2	定義 1.7.8	定義 1.7.12
p.42 ↑ 8, ↑ 10, ↑ 12	f^*	f_*
p.48 ↓ 8	c^1	C^1
p.49 ↓ 1	系 5.7.2	系 5.7.2 と定理 5.3.3
p.52 ↑ 8, ↑ 3	$f^* O$	$f_* O$
p.53 ↑ 4, ↑ 6	$\tilde{w}$	$\tilde{w}$
p.55 ↑ 7	$\sum_{(j_1, \dots, j_k)}$	$\sum_{(j_1, \dots, j_k)}$
p.56 ↓ 12	$(w_1 \cdots w_{m-1})$	$(w_1, \dots, w_{m-1})$
p.56 ↑ 3	$g_{mj_1 \cdots j_k}$	$g_{mj_1 \cdots j_k}$

ページ, 行	誤	正
p.57 ↑ 14	証明の次に以下の文章を追加挿入。	
	「簡単のため L も柱状集合としよう。以下必要なのはこの場合だけである。(一般の場合は(6.1.2)を用いて以下の証明を翻訳すればよい。)」	
p.64 ↑ 13	K_{U_i}	$\bar{K}_{U_i}$
p.64 ↑ 4	「 L はコンパクトだから,」を削除。	
p.76 ↑ 4	S^{n-1}	S^{n-1}
p.80 ↑ 7	$F(z)$	$G(z)$
p.81 ↑ 8	点は	点の虚座標は
p.81 ↑ 7	集合と	集合の合併と
p.81 ↑ 4	$a+bi \in \partial U_1, R^n - b \in I^0$	$a+bi \in \partial U_1, R^n, -b \in I^0$
p.84 ↓ 12	Δ	$\mathcal{A}$
p.91 ↑ 4	H^s_p	H^s_p
p.92 ↓ 1	C	$\mathcal{C}$
p.100 ↑ 9	しかし無限小楔	しかし $F(z)$ の定義域である無限小楔
p.104 (7.1.21)式	$E\eta^{j_1} \cap \cdots \cap E\eta^{j_n}$	$E_{\eta^{j_1}} \cap \cdots \cap E_{\eta^{j_n}}$
p.105 ↑ 13	には大域的切断が	には 0 以外の大域的切断が
p.105 ↑ 12	さえ含み得ず,	さえ大域的切断として許さず,
p.106 ↓ 14	完全列	自然な複体
p.106 ↓ 15	以下の文章を追加。	
	「更に任意の凸開集合 $U \subset \mathbb{C}^n$ に対して始めの列の切断加群の複体が完全となるならば, 任意の凸開集合 $\Omega \subset \mathbb{R}^n$ に対し後の列の切断加群の複体は完全となる。従って特に後の列は層の完全列となる。」	
p.112 ↓ 1	$\sum_{\sigma} G(x + i\Gamma_{\sigma}0)$	$\sum_{\sigma} \operatorname{sgn} \sigma G(x + i\Gamma_{\sigma}0)$
p.112 ↓ 12(2カ所)	$\sum_{\sigma} G$	$\sum_{\sigma} \operatorname{sgn} \sigma G$
p.113 ↑ 8	$\sum_{\sigma} G$	$\sum_{\sigma} \operatorname{sgn} \sigma G$
p.113 ↑ 8	$\sum_{\sigma} H$	$\sum_{\sigma} \operatorname{sgn} H$
p.115 (7.2.20)式	$\mathcal{H}^n_{S^*R^*}(\tilde{C}^n, \pi^{-1}O)$	$\mathcal{H}^n_{S^*R^*}(\pi^{-1}O)$

ページ, 行	誤	正
p.116 ↓ 2	「工夫する。」の後に次の文章を追加挿入。 「 $K_k = \bar{Q} \setminus Q_k$ とおこう。」	
p.116 ↓ 3	$K_k = \bar{Q} \setminus Q_k$	$ K_k$
p.127 ↑ 3	「この定理の…」以下を新段落とする。	
p.128 ↓ 16	「解けば」の次に「(問 6.3.3 参照)」を追加挿入。	
p.128 ↑ 10	$\mathcal{B}^{(0',k)}$	$\mathcal{B}^{(0,k)}$
p.128 (7.4.14) 式	$0 \xrightarrow{\bar{\partial}} \mathcal{O}_X \rightarrow \mathcal{B} \xrightarrow{\bar{\partial}} \mathcal{B}^{(0,1)}$	$0 \rightarrow \mathcal{O}_X \rightarrow \mathcal{B} \xrightarrow{\bar{\partial}} \mathcal{B}^{(0,1)}$
p.129 ↑ 13	$H^k_{S \times V}$	$H^k_{S \times V}$
p.133 ↓ 10	$\sup_{z \in R_c}$	$\sup_{z \in R_c}$
p.136 ↑ 9	$1/\varepsilon^2$	$1/\varepsilon^2$
p.144 ↓ 6	$\bar{O}$	$\tilde{O}$
p.150 ↓ 10	$id.$	id
p.154 ↓ 7	$\bar{O}$	$\tilde{O}$
p.154 ↓ 14	$\bar{O}$	$\tilde{O}$
p.158 ↓ 1	$\cos^2 xy$	$\cos 2xy$
p.160 ↑ 4	$Q \rightarrow Q$	$Q \rightarrow Q$
p.161 ↓ 13	$F(Z)$	$F(z)$
p.162 ↑ 12	の函数	ξ の函数
p.166 ↓ 14	$\bar{\Gamma}^\circ$	$\bar{\Gamma}^\circ$
p.166 ↑ 9	Γ° の外で	Γ° の内部で
p.166 ↑ 4	$\bar{\Gamma}^\circ$	$\bar{\Gamma}^\circ$
p.167 ↓ 4	$\bar{\Gamma}^\circ$	$\bar{\Gamma}^\circ$
p.167 ↓ 16	$\operatorname{Re} \zeta$	$\operatorname{Re} \zeta$
p.167 ↑ 3	$\Gamma^\circ = \{\eta \in R^n; H_K(\eta) = +\infty\} \cup \{0\}$ とおく。	$\Gamma^\circ = -\{\eta \in R^n; H_K(\eta) = +\infty\}^\circ$ とおく (Γ° は K の漸近錐である)。
p.168 ↓ 2	$O(e^{c \zeta + H_K(\operatorname{Im} \zeta)})$	$O(e^{c \zeta + H_K(\operatorname{Im} \zeta)})$
p.168 ↑ 13	$\bar{Q}(D^n)$	$\bar{Q}(D)$
p.172 ↓ 3	位相同型	位相的型
p.173 ↑ 11	$\varepsilon/2k$	$\varepsilon/2^k$
p.175 ↑ 12	このままでは $(1+ z ^2)e^{-\psi(z)}f(z)/J(z) \in L_2(U \cap C^n)$ と限らない。この証明は $-\log d(z)$ よりもう少し複雑な多重劣調和函数 $\theta(z)$ で $\bar{V} \subset U$ なる任意の $V \subset C^n$ 上有界となるものを用いて書き直す	

ページ, 行	誤	正
	必要がある. 実は全く一般の U についてはこのような函数の存在はまだ知られていないが, 凸開集合や, Grauert の定理 6.4.1 の証明で用いた型の複素近傍などについてはこのような函数を容易に構成できるので, 以下の議論には十分である.	
p.176 ↑ 2	一方が Hausdorff	一方がすべて Hausdorff
p.177 ↑ 2	$\tilde{O}$	$\tilde{Q}$
p.178 ↓ 6	$\tilde{O}$	$\tilde{Q}$
p.178 ↓ 7	$\delta_{\epsilon, d}$	$\delta_{\epsilon, d}$
p.182 ↓ 14	$H^n(\pi_* \mathcal{M}(X)) \rightarrow H^n(\mathcal{M}(X \times I))$	$H^n(\pi_* \mathcal{M}'(X)) \rightarrow H^n(\mathcal{M}'(X \times I))$
p.184 ↑ 4	「…わかる。」の次に「次参照。」を追加.	
p.184 ↑ 2~3	の完全性を示せばよい.	を導くことができる.
p.184 ↑ 1~2	「ただし…」以下を削除. 代わりに次の文章を追加. 「後半は上の議論を Ω の凸近傍 U と, それから定まる例 7.1.3 a) の被覆による被覆コホモロジーに置き換えて遂行すればよい。」	
p.187 ↑ 3	$(x \mp i0)^{-\lambda-1}$	$(\xi \mp i0)^{-\lambda-1}$
p.188 ↑ 11	$(i\xi - 1)\hat{f}(\xi) = 0.$	$(i\xi - 1)\hat{f}(\xi) = 0.$
p.189 ↑ 13	のときは正	のときは(正)
p.191 ↓ 8	原 [5]	原 [3]
p.191 ↓ 9	柏原 [3]	柏原 [5]
p.198 右 ↓ 4	多種円板	多重円板